

# コンラート・ゲスナー『万有書誌』と宗教改革

雪 嶋 宏 一

## 1. はじめに

筆者は本誌前号で「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」と題して、16世紀スイスの博物学者コンラート・ゲスナー（Gessner, Conrad, 1516-1565）の初期の代表的著作であり今日では書誌学・図書館学の基本文献ともなっている『*Bibliotheca Vniuersalis*（万有書誌）』第1巻（Zürich: Christoph Froschauer, 1545, 以下前稿と同様にBV1と略）に収録された著者の数を算定して、従来の説である約3,000名ではなく5,200名以上であることを明示した。そして、これらの著者の情報は、トリテミウス（Trithemius, Johannes, 1462-1516）の書誌『*De scriptoribus ecclesiasticis*（聖職にある著者たちの目録）』（Basel: Johann Amerbach, 1494）を基礎にしながら古代から16世紀までに発表された様々な書誌や著書、各地の図書館および図書館蔵書目録、印刷業者の販売目録、印刷出版された作品そのものを参照していたことについて述べた。さらに、ゲスナーによる記述要素を分析して、トリテミウスが行った中世以来の著者の略伝を主体に書名・巻数の一覧を付す記述方法から脱却して、略伝の要素を極力省略して著作の書名、印刷地、印刷者、印刷年、判型、葉数、内容、目次、序文の引用という書物の記述を主体とする方法を編み出していたことを考察した。また、この分析の際にBV1の各項目の記述がA-Iの前半部分で比較的長く、K-Zの後半部分では短くなる傾向があることを統計的に示した。そして、その理由としてゲスナーには後半部分の項目をじっくりと執筆する時間がなかったのではないかと推測した<sup>1</sup>。

このような前稿に基づいて、本稿ではBV1の項目の内容を具体的に検討するためゲスナーと同時代の16世紀前半に執筆活動を行った著者たちがBV1にどの程度収録されているのかを調査し、その中でも比較的記述の長い著者たちがどのような人物であるのかを確認して、そこからゲスナーがどのような立場から『万有書誌』を執筆したのかを考えたい。この時代はルネサンス人文主義と宗教改革の最盛期であったため、時代の思潮がBV1にどのように反映されているのかを知ることができるからである。そして、さらにゲスナーの『万有書誌』執筆の目的が何であったのかを考察できると考えたからである。また、その後ゲスナーはカトリック教会から異端とみなされ『万有書誌』は禁書目録に掲載されて禁書に指定された。なぜ『万有書誌』が禁書に指定されたのかその要因について考えてみたい。なおこれまでにBV1に収録された16世紀の著者に注目した研究は寡聞にして知らない。

## 2. 宗教改革とゲスナー

ゲスナーの『万有書誌』を論じる際に彼が生きた時代の最大の出来事であった宗教改革について考慮し、彼と改革との関係を考えてみる必要がある。ゲスナーがチューリヒで誕生した1516年には、エラスムス（Erasmus, Desiderius, 1466-1536）がギリシア語版新約聖書を初めて校訂してラテン語訳と注釈を付した『*Novum Instrumentum*（新約聖書）』（Basel: Cratander）が刊行され、宗教改革にとって極めて重要な年となった。この新約聖書によってカトリック教会がそれまで聖典として絶対視してきたヒエロニムス（Hieronymus, 347-419/20）によるラテン語ウルガタ訳『聖書』のテキストとの違いが歴然とし、ウルガタ訳に意訳や間違いがあることが明らかになったのである<sup>2</sup>。

翌年10月31日にはマルティン・ルター（Luther, Martin, 1483-1546）がヴィッテンベルクで贖宥状の販売に抵抗してカトリック教会の矛盾を批判するために『*Disputatio pro declaratione virtutis indulgentiarum*（95カ条の提題）』をラテン語で記した檄文を聖堂の扉に掲げて福音に基づく教会の改革を唱えた。この『提題』はすぐにドイツ語に翻訳印刷されて2週間でドイツ全土に流布したという<sup>3</sup>。そして、ルターの著作はドイツ各地で印刷されて瞬く間に普及した。1517-20年の間だけでルターの著作は30万部以上印刷されたと推測されている<sup>4</sup>。さらに、ルターはエラスムス校訂『新約聖書』に基づいて福音の正しい内容を人々に伝えるために新約聖書をドイツ語に翻訳し、さらに人々の理解を助けるためにクラナハ（父）（Cranach, Lukas, 1472-1553）の工房で制作された21枚のページ大の木版画を挿入して『*Das Neue Testament Deütsch*（ドイツ語新約聖書）』（Wittenberg: Melchior Lotther）を1522年9月21日に3,000部も印行した（いわゆる *September Testament*）。翻訳者の氏名は本には印刷されていなかった。同年12月にはこの新約聖書の海賊版（*Das new Testament yetzund recht grüntlich teuscht*）がバーゼルのペトリ（Petri, Adam）から印行され、また同月にルター訳の改訂第2版がヴィッテンベルクから刊行されるという勢いであった。1522-29年の間にこの『ドイツ語新約聖書』はドイツ各地で50版以上刊行されるという驚異的な出版数を記録した<sup>5</sup>。ルターが亡くなるまでの30年間で彼の著作は全部で約3,700版印刷されたという<sup>6</sup>。ゲスナーは少年時代にこのような印刷本の広範な普及を目の当たりにしていた。

1520年代のチューリヒではグロスミュンスター司牧司祭ツヴィングリ（Zwingli, Huldreich, 1484-1531）がルターの改革に触発されて福音主義を唱えて宗教改革を推進していた。ツヴィングリは同時にプロテスタント教育を行うために奨学金制度を設けた。ゲスナーはツヴィングリを間近に見て成長してまさに宗教改革の最中にいた。ゲスナーは1530年にツヴィングリにラテン語で手紙を認めて学費の援助を願い出た<sup>7</sup>。ツヴィングリはゲスナーの才能を評価して奨学金を認めた。翌年ツヴィングリは宗教改革のために戦ったカッペルの戦いで戦死した。ゲスナーの父もその戦いで亡くなった<sup>8</sup>。こうして、ゲスナーは生涯にわたってツヴィングリを深く敬愛しプロテスタント主義を貫くことになった。

その後、ゲスナーは留学の途上の1534年にパリに滞在した。彼はBV1の自分自身の項目

“CONRADVS Gesner”の中でパリの Academia に言及し、ギリシア語、ラテン語、歴史家、詩人、医者、文献学者、論理学者、修辞学者などのさまざまな著者の書物を読みふけったと述べている<sup>9</sup>。彼が利用した図書館はこの Academia つまりカトリック神学の最高権威であったパリ大学の図書館であったと考えられる。当時は王立図書館はまだパリ郊外のフォンテーヌブローにあり、ゲスナーがそこを訪問したという証拠はない。パリ大学図書館は当時フランスでは最高のコレクションを蔵する図書館であった。ところが、その年にリヨンとパリで同時にカトリック教会を批判する檄文が撒かれるという「檄文事件 (Affaire des Placards)」が起こった。フランス国王フランソワ1世の部屋にもそれが貼られていたという。これによってフランソワ1世は激怒して強硬にプロテスタント弾圧に乗り出した<sup>10</sup>。プロテスタント信者は逮捕され火刑に処せられた。また、プロテスタントの書物は川に投げ捨てられたり焚書にあったという。ゲスナーはパリでそれを目撃していた。ゲスナーは恐れをなしてその年の12月にシュトラスブルクの宗教改革者ブツァー (Bucer, Martin, 1491-1551) のもとへ逃避した。そこでツヴィングリの後継者プリンガー (Bullinger, Heinrich, 1504-75) に宛ててパリでの恐怖を伝える手紙を綴った<sup>11</sup>。

シュトラスブルクでヘブライ語の勉強をした後、ゲスナーは帰郷して結婚するが、1536年には医学を修めるためバーゼルに留学した。ところが、1537年にローザンヌでアカデミーが創設されると、ゲスナーは初代ギリシア語教授に招聘されたため、医学の勉強も半ばでローザンヌへ移った<sup>12</sup>。その頃ローザンヌの同盟都市ジュネーブではフランス人改革派のファレル (Farel, Guillaume, 1489-1565) が改革を起こそうとしていた。また、バーゼルで『*Christianae religionis institutio* (キリスト教綱要)』(Basel: [per Thomam Platterum et Balthasarem Lasium], 1536) を出版したばかりのカルヴァン (Calvin, Jean, 1509-64) がジュネーブに合流して改革に動いていた<sup>13</sup>。

このようにゲスナーはBV1を執筆するまでの若き時代には宗教改革の最中におり、改革派の書物が瞬く間に流布することで印刷術の威力を実感していた。また同時にカトリックによるプロテスタント弾圧も身をもって知り、ゲスナー自身大きな衝撃を受けていたと考えられよう。

### 3. BV1に著録された16世紀の著者たち

宗教改革の真ただ中においてラテン語、ギリシア語、ヘブライ語で書かれた古今の書物を残らず記録しようとして『万有書誌』を構想したゲスナーは16世紀の同時代の著者をどのように著録したのであろうか。そこにはゲスナーの知り合いや友人たちも見られる。実際には多数のプロテスタントの著者たちが含まれているのではなかろうか。このような問題意識から収録された16世紀の著者たちがどのような人物であったのかを調査した。

その際、BV1における16世紀の著者をどのように定義するかを考えてみなければならない。おそらく、一般的には16世紀に執筆活動した人物となろう。しかし、BV1が刊行されたのはトリエント公会議が開催される直前の1545年9月である。当時はまだ15世紀生まれの人々が活躍していた時代であるので、15世紀人と16世紀人をどのように区別すべきかが問題となろう。本稿では一応

次のように定義した。つまり、トリテミウスの書誌およびその他の書誌に収録されておらず、著作の多くが16世紀になってから印刷出版された人物とした。トリテミウスの書誌ではそれが刊行された1494年時点で生存している人物も多数収録している。ゲスナーはそれらの人物には「T.cl. 1494」という典拠記号を欄外に記入している。したがって、これらの著者は15世紀の人物として便宜的に扱った。トリテミウス自身も16世紀初めに著作を多数発表しているが、この書誌の末尾で自らも収録しているため15世紀人とした。一方、ゲスナーはトリテミウスの書誌については1512年パリ版(第2版増補版)の1531年ケルン再版を参照しており、補遺された人物については「T. in appedice」と記載している。増補版に新たに収録された人物については一応16世紀に活躍した人物として算入した。さらに、出生年代については1460年代以降として、1450年代に生まれ人生の大半を15世紀に過ごした人物を便宜的に除いた。

ゲスナーは著者の記述の際に時折「nostri saeculi (我々の世紀の)」(7r, Aemylius Ferretus; 353r, Iacobus Faber), 「nostro tempore (我々の時代において)」(224v, Eucharius Rhodion; 321v, Hieremias Brachelius), 「nostri temporis (我々の時代の)」(247v, Francisci Deloini; 384v, Ioannes Atrocianus), 「hoc tempore (この時代において)」(381r, Ioannes Aepinus; 551r, Petri Martyris), 「nostra aetate (我々の時代に)」(37v, Andreas Alciatus), 「uir mihi amicissimus (私にとって最も親しい人)」(328v, Hieronymus Guntzius), 「mihi amicus (私の友人)」(361v, Iacobus Rueff), 「amicitiae iure mihi coniunctissimus (私の友人たちの中で本当に最も親密な)」(418v, Ioannes Frisius), 「Vidi hominem Venetijs superior anno. (私はその人に1年前に会いました)」(358v, Iacobus Mantinus), 「anno 1543, Venetijs uidi (1543年にヴェネツィアで会いました)」(387r, Ioannes Baptista Egnatius), 「praeceptor meus (わが師)」(530v, Osvaldus Myconius; 611r, Theodorus Bibliander) などという言葉で同時代人を明記している。これらの表現のある著者については当然16世紀人とみなして差支えなからう。なお、16世紀の人物として確定するためにさらにヨーロッパ研究図書館コンソーシアム (Consortium of European Research Libraries) が構築した西洋古版本目録の典拠データベース CERL Thesaurus<sup>14</sup>, 『新カトリック大事典』(研究社, 1998年), *New Catholic encyclopedia*, 2<sup>nd</sup> ed. (Detroit: Thomson/Gale, 2003), その他各国の人名事典などを調査して人物の確認を行った。

調査によってBV1に収録された16世紀の著者の数を表1に示した。16世紀前半に活躍した著者601名が収録されていることが確認できた。しかし、これらの数からは活動の年代がはっきりと確認できなかった人物は除いているため、実際にはもっと多くの人数となることは間違いない。したがって、ここに示した人数はBV1に収録された16世紀人の大半ではあるがすべてではないことを予めお断りしておきたい。筆者は前稿でBV1に収録された著者の数を5,200名以上としたので、16世紀前半に活躍した著者はその11.6%程度に当たる。古代から16世紀前半までにラテン語、ギリシア語、ヘブライ語で著作をものした人々のうち1割以上が16世紀前半に活躍した人物であるということは予想以上に多いのではなからうか。

表1 BV1に収録された16世紀の著者数

A	65
B	17
C	30
D	8
E	11
F	22
G	45
H	35
I	154
K	2
L	18
M	31
N	24
O	8
P	48
Q	0
R	10
S	33
T	17
V	19
X	1
Y	0
Z	3
合計	601

次に、これらの人物の中でゲスナーが特に注目していたと思われる著者を知るため便宜的に記述が1ページ分（51行）以上の著者を抽出してみた。その結果をBV1掲載順に一覧にしたのが表2である。全部で75名を抽出することができた。彼らが歴史的にどのような立場にあったのかを「学者」, 「プロテスタント」, 「カトリック」に大別した<sup>15</sup>。

「プロテスタント」はプロテスタントの聖職者として改革思想を唱えた人物あるいはメランヒトン (Melancton, No. 71) のように学者であるが宗教改革者として歴史的に著名な人々である。

「学者」はプロテスタントあるいはカトリックのいずれかの信仰をもっていたが、聖職者として宗教改革運動あるいは反宗教改革運動に積極的に関わることなく、やや距離をおいて学者として著作をなしたと思われる人物とした。なお、ドレ (Dolet, No. 74) は人文主義者で著作もあるが同時に「異端の書」を売りさばいた出版業者であるがとりあえずここに含めた<sup>16</sup>。

「カトリック」はカトリックの聖職者としてカトリック神学を堅持した人物とした。ルフェーヴル＝デターブル (LeFèvre d'Étaples, No. 32) は宗教改革に多大な影響を与えたが、自身は「異端」の誹りを避けながらカトリックの聖職者であったためここに含めた。

このように区別すると、75名のうち「プロテスタント」が26名、「学者」が38名、「カトリック」が11名であった。

表2 BV1に収録された16世紀の著者のうち51行以上記述された著者

No.	BV1の項目名	掲載箇所	行数	CERL Thesaurus	プロテスタント	学者	カトリック
1	ANDREAS Alciatus Mediolanensis	37v-38v	108	Alciati, Andrea (1492 - 1550)		○	
2	ANDREAS a Lacuna Secobiensis	39v-40r	53	Laguna, Andrés de (1499 - 1560)		○	
3	ANDREAS Osiander	40v-41r	77	Osiander, Andreas (1496 - 1552)	○		
4	ANDREAE Vesalii Bruxellensis	42r-42v	70	Vesalius, Andreas (1514 - 1564)		○	
5	ANTONII Coruini Zytogalli	56r-57r	117	Corvinus, Anton (1501 - 1553)	○		
6	ANTONVS Musa Brasauolus Ferrariensis	61v-62v	74	Brasavola, Antonio Musa (1500 - 1555)		○	
7	AONII Palearij Verulani	64r-64v	55	Paleario, Aonio (1503 - 1570)		○	
8	AVGVSTINI Iustiniani Genuensis	104v-105r	96	Giustiniani, Agostino (1470 - 1536)			○
9	AVGVSTINVS Niphus Philotheus Sueffanus	105v-109r	364	Nifo, Agostino (1470 - 1538)			
10	AVGVSTINI Steuchi Eugubini	109r-110r	101	Steuco, Agostino (1497 - 1548)			○
11	CAELII Calcagnini	154r-154v	51	Calcagnini, Celio (1479 - 1541)		○	
12	CAROLVS Stephanus	162v-163r	55	Estienne, Charles (1504 - 1564)		○	
13	CHRISTIPHORI Hegendorphini	165v-166r	63	Hegendorf, Christoph (1500 - 1540)	○		
14	CONRADVS Gesnerus Tigurinus	179v-183r	349	Gesner, Conrad (1516 - 1565)		○	
15	CONRADVS Pellicanus Rubeaquensis	183v-185r	142	Pellicanus, Conrad (1478 - 1556)	○		
16	DESIDERIVS Erasmus	197v-204r	680	Erasmus, Desiderius (1466 - 1536)		○	
17	ERASMI Sarcerij Annaemontani	222v-223v	84	Sarcerius, Erasmus (1501 - 1559)	○		
18	FRANCISCI Floridi Sabini	248r-249v	158	Florido, Francesco (1511 - 1547)		○	
19	FRANCISCI Lamberti Auentionensis	249v-250r	75	Lambert, Francois (1486 - 1530)	○		
20	FRANCISCVS Sylvius Ambianus	259v-260r	55	Dubois, François (- 1530)		○	
21	FRANCISCI Titelmanni Hassellensis	260r-260v	60	Titelmans, Franciscus (1502 - 1537)			○
22	GASPAR Megander Tigurinus	265v-268r	61	Megander, Kaspar (1495 - 1545)	○		
23	GILBERTVS Cognatus Nozerenus	275v-276r	65	Cousin, Gilbert (1506 - 1572)		○	
24	GREGORIVS Haloander	279r-280v	127	Haloander, Gregor (1501 - 1531)		○	
25	GVILHELMVS Budaeus Parisiensis	287r-288v	149	Budé, Guillaume (1467 - 1540)		○	
26	GVILHELMVS Postellus Barentonius Doleriensis	292r-293v	160	Postel, Guillaume (1510 - 1581)		○	
27	HADRIANI TT. S. Chrysogoni	296r-297r	119	Castellesi, Adriano (1485 - 1521)			○
28	HEINRYCHVS Bullingerus	303v-307r	367	Bullinger, Heinrich (1504 - 1575)	○		
29	HENRICI Cornelij Agrippae ab Nettesheyem	307r-309v	261	Agrippa, Heinrich Cornelius (1486 - 1535)	○		
30	HENRICVS Glareanus Heluetius	310r-310v	66	Glarean, Heinrich (1488 - 1563)			
31	HVLDRICHVS Zuinglius Toggius	343v-350r	687	Zwingli, Huldrych (1484 - 1531)	○		
32	IACOBVS Faber Stapulensis	353r-356r	320	LeFèvre d'Étaples, Jacques (1501 - 1575)			○
33	IACOBVS Lodoicus Strebaeus Rhemensis	357v-358v	105	Estrebay, Jacques Louis d' (1481 - 1550)		○	
34	IACOBVS Omphalius Antoniacensis	360r-360v	60	Omphalius, Jakob (1500 - 1567)		○	
35	IACOBVS Schegkijus Schorndorfensis	362r-363v	123	Schegk, Jacob <der Altere> (1511 - 1587)	○		
36	IACOBVS Sylvius Ambanus	363v-365v	164	Dubois, Jacques (1478 - 1555)		○	
37	IACOBVS Zieglerus Landaus Bauarus	367r-368r	126	Ziegler, Jacob (1470 - 1549)	○		
38	IOACHIMVS Camerarius Pabergensis	373v-375r	175	Camerarius, Joachim (1500 - 1574)		○	
39	IOACHIMVS Perionius Cormoeriacenus	376r-377r	111	Péron, Joachim (1499 - 1559)			○
40	IOACHIMVS Vadianus	377r-379v	258	Vadian, Joachim (1484 - 1551)		○	
41	IOANNES Auentinus	384v-386v	190	Aventinus, Johannes (1477 - 1534)		○	
42	IOANNES Bernardus Felicianus	389r-389v	59	Feliciano, Giovanni Bernardo (1490 - 1552)		○	
43	IOANNES Brentius	391v-393r	169	Brenz, Johannes (1499 - 1570)	○		
44	IOANNIS Bugenhagij Pomerani	393v-394v	112	Bugenhausen, Johannes (1485 - 1558)		○	
45	IOANNES Caesarius Iuliacensis	394v-395r	56	Caesarius, Johann (1460 - 1550)		○	
46	IOANNES Caluinus Nouidunensis	395v-396v	121	Calvin, Jean (1509 - 1564)	○		
47	IOANNES Cochleus Norimbergensis	407v-408r	66	Cochlaeus, Johannes (1479 - 1552)			○
48	IANNIS Cuspiniani ex orientalis Franciae	409r-409v	63	Cuspinianus, Joannes (1473 - 1529)		○	
49	IOANNES Eccius Sueuus	414r-414v	61	Eck, Johann (1486 - 1543)			○
50	IOANNIS Fabri	415r-415v	56	Fabri, Johannes (1478 - 1541)			○
51	IOANNES Franciscus Picus Mirandulae	417r-418v	122	Pico della Mirandola, Giovanni Francesco (1469 - 1533)			
52	IOANNES Gastius Brisacensis	419r-419v	69	Gast, Johann (- 1552)	○		
53	IOANNES Lodoicijus Viues Valentius	430v-434r	364	Vives, Juan Luis (1492 - 1540)		○	
54	IOAN. Lonicerus	434r-434v	54	Lonicer, Johannes <Philologe> (1499 - 1569)	○		
55	IOAN. Manardi	435r-436v	140	Manardi, Giovanni (1462 - 1536)		○	
56	IOANNES Monhemius	438v-439r	53	Monheim, Johannes (1509 - 1564)		○	
57	IOANNES Oecolampadius	442r-445r	267	Oecolampadius, Joannes (1482 - 1531)	○		
58	IOANNES Oldendorpius	445r-445v	93	Oldendorp, Johann (1480 - 1567)		○	
59	IOA. Rautij Textoris Niuernensis, siue Nauerrensis	449v-450r	74	Ravisius Textor, Joannes (1480 - 1524)			○
60	IOANNIS Riuij Atthendoriensis	450v-451v	71	Rivius, Johann (1500 - 1553)	○		
61	IOANNIS Ruellij	451v-452v	90	Ruel, Jean (1479 - 1537)		○	
62	IOAN. Sturmijus	456v-457r	58	Sturm, Johannes <Pädagoge> (1507 - 1589)			
63	IODOCVS Vuillichijus Resellianus	464v-465r	53	Willich, Iodocus (1501 - 1552)			
64	LEONHARTVS Fuchsius	480v-481r	60	Fuchs, Leonhard (1501 - 1566)		○	
65	MARTINVS Bucerus	500v-501r	76	Bucer, Martin (1491 - 1551)		○	
66	MARTINVS Lutherus	501v-505v	401	Luther, Martin (1483 - 1546)	○		
67	NICOLAVS Bellonus	517v-518r	52	Belloni, Niccolò (- 1552)		○	
68	OTHO Brunfelsijus Maguntinus	531r-532v	137	Brunfels, Otto (1488 - 1534)		○	
69	PAVLVS Fagius	537v-538v	81	Fagius, Paul (1504 - 1549)	○		
70	PAVLI Ricij Israelitae	539v-540v	75	Ricius, Paulus (1480 - 1541)		○	
71	PHILIPPVS Melanchithon	556v-559r	253	Melanchton, Philippe <1497-1560> (1497 - 1560)			
72	SANTIS Pagnini Lucensis	590v-591r	82	Pagnini, Sante (1470 - 1541)			○
73	SEBASTIANVS Munsterus	593v-595r	142	Münster, Sebastian (1488 - 1552)		○	
74	STEPHANVS Doletus Aurelius	602v-603r	53	Dolet, Étienne (1509 - 1546)		○	
75	THEODORVS Bibliander	611r-611v	53	Bibliander, Theodorus (1504 - 1564)		○	

これらの著者のうちゲスナーが特に関心をもっていた人物を特定するために記述の行数の多い順に見てみよう。最も記述が長いのがツヴィングリ（No.31）で687行に及んでいる。続いてエラスムス（No.16）で680行である。次がルター（No.66）で401行である。そして、プリンガー（No.28）が367行。これら4名のうちエラスムス以外の3名は著名なプロテスタント運動の指導者であった。なお、前述のようにツヴィングリとプリンガーはゲスナーの親しい知人であった。エラスムスはカトリックを批判したが、ルターと袂を分かってプロテスタント改革には加わらなかった学者であるが、プロテスタント運動に非常に大きな影響を与えたことは周知の事実である。

次に記述の長いのはニフォ（Nifo, No.9）とビベス（Vives, No.53）とともに364行、続いてゲスナー自身（No.14）で349行、次がルフェーヴル＝デタープル（No.32）で320行となる。彼らのうちニフォとビベスはカトリックの学者である。ニフォはイタリアの哲学者、ビベスはスペインの人文主義者であった。ゲスナーはBV1の随所でビベスの古典学研究を参照している。そして、ゲスナー自身はプロテスタントの学者であり、ルフェーヴル・デタープルは前述の通りカトリックの神学者であるが、エラスムスの友人としてフランスにおける改革運動に多大な影響を与えた。

これらに続くのがエコランパディウス（Oecolampadius, No.57）の267行、アグリッパ（Agrippa, No.29）の261行、ヴァディアン（Vadian, N.40）の258行、メランヒトン（No.71）の253行である。彼らのうちヴァディアン以外はいずれもプロテスタント運動の指導者であった。ヴァディアンは学者でありザンクト・ガレンの市医となるが、ツヴィングリから影響を受けて改革派となり、ザンクト・ガレン市長となって市の改革を行った人物である。

次に記述の多い著者はアヴェンティヌス（Aventinus, No. 41）190行、ブレンツ（Brenz, No. 43）169行、ジャック・デュヴォワ（Jacques Dubois, No. 37）164行、ポステル（Postel, No. 26）160行、フロリド（Florido, No. 18）158行、ビュデ（Budé, No. 25）149行、ペリカン（Pellicanus, N. 15）とミュンスター（Münster, No. 73）がともに142行、マナルディ（Manardi, No. 56）140行、ブルンフェルス（Brunfels, No. 68）137行である。彼らのうちブレンツとブルンフェルスがプロテスタント指導者であり、ペリカンとミュンスターはスイスで活躍したプロテスタントの人文主義の学者であり、他の6名はイタリア、フランスの学者、人文主義者でありいずれもカトリック側であった。

ゲスナーの記述の長さはそれぞれの著者の著作の多寡にも関係するが、より重要なのは彼らに対するゲスナーの関心の高さであろう。実際ツヴィングリ、エラスムス、ルターに関する長い記述は彼らの全集（opera omnia）の内容を詳細に解説したものである。このようにゲスナーが同時代人の中でも特に関心をもっていた著者たちの多くがプロテスタントのリーダーあるいは学者、カトリックの信仰をもちながら教会の批判者であったことはゲスナーのプロテスタント主義者としての立場が反映しているとみなすことができよう。他方、ゲスナーはカトリックの学者・人文主義者への関心も少なからず持っていたことは学者としての探求心故であろう<sup>17</sup>。

ところで、前稿においてBV1で記述が特に長い著者を一覧にした<sup>18</sup>。そこでは行数を示していなかったのが本稿で改めて行数を示しておこう。最長はアリストテレスであり2,009行（Aristoteles

Stagiriae, 72v-91v), 次がアウグスティヌスで1,334行 (Aurelius Augustinus, 112v-124v), これらに継ぐのが上記で示したツヴィングリとエラスムスであり, その次がヨハネス・クリュソストモスの637行 (Ioannes Chrysostomus, 401v-407v), アエネアス・シルウィウス(教皇ピウス2世)の629行 (Aeneas Syluius, 8r-14r), ヒエロニュムスの588行 (Hieronymus Stridonensis, 321v-327v), エウセビウスの539行 (Eusebius Caesareae, 231v-236v) である。彼らに続くのがルターである。

これらの中には中世のカトリック神学者たちが見当たらない。中世の著名な神学者に関するゲスナーの記述量を次に掲げてみよう。ペトルス・ロンバルドゥスが20行 (Petrus Lombardus, 550r-550v), アルベルトゥス・マグヌスが156行 (Albertus Magnus, 18v-20r), トマス・アクイナスが165行 (Thomas Aquinas, 615v-617r), ボナヴェントゥラが23行 (Bonaventura, 148v-149r), オッカムのウィリアムが15行 (William of Ockham, 291v), ジャン・ジェルソンが184行 (Ioannes de Gerson, 420v-422r) である。アリストテレス, 初期教父, 16世紀の著者たちと比較すると驚くほど記述が短い。ゲスナーが彼らについて情報を持っていなかったはずはないので, そこにゲスナーによる情報の取捨選択があったのである。

#### 4. ゲスナーと同時代の印刷出版業者たち

ゲスナーは同時代に刊行される大量の印刷本の情報を『万有書誌』に採録した。それらの情報の多くはフランクフルトの大手で入手した印刷出版業者が発行する印刷・販売書目録や, ゲスナーと親しかったバーゼルやチューリヒ, その他の都市の印刷業者から直接得た情報であったと思われる。彼はBV1に続いて刊行した『総覧あるいは万有書誌第2巻』(1548年, 分類I-XIX収録)(以下BV2-1)とその続編『神学の部』(1549年, 分類XXI収録)(以下BV2-2)の各分類の先頭でこれらの印刷業者へ讃辞を贈っている。表3にその一覧を示しておこう。

表3 BV2-1, BV2-2の各分類の先頭に掲載された印刷出版業者

分類番号	分類名	ゲスナーの讃辞表現	印刷出版業者名	印刷出版地	掲載箇所	讃辞文行数	目録掲載タイトル数	執筆年月-日
I	De Grammatica	CLARISSIMO TYPOGRAPHO CHRIS- TOPHORO FROSCHOVERO	Christoph Froschauer (1490- 1564)	Zürich	*5v-*6v	38	64	1548-8-21
II	De Dialectica	CLARISSIMIS VIRIS IOAN. BEBELIO. ET MICHAELI ISINGRINIO EIVS GENE=   ro typographis celeberrimis	Johann Bebel (d. 1550), Michael Isengrin (1500-57)	Basel	43r-43v	56		
III	De Rhetorica	IOANNI OPORINO TYPOGRAPHO AB ERDVITINE ET DILIGENTIA LAV=   datissimo	Johann Oporinus (1507-68)	Basel	49r-49v	84		1548-1-5
IV	De Poetica	NICOLAO BRYLINGERO TYPOGRA- PHO BASILIENSI DILIGENTISSIMO	Nikolaus Brylinger (1499- 1559)	Basel	59r	24		
V	De Arithmetica	ROBERTO STEPHANO REGIO TYPO- GRAPHO LVETITIAE PARISIORVM	Robert Estienne (1499-1559)	Paris	73r	33		1548-1-23
VI	De Geometria	ORNATISSIMO VIRO IOANNI PETREIO. TPOGRAPHO EXCELLENTI	Johann Petrius (1497-1550)	Nürnberg	77r	51		1548-1-23
VII	De Musica	EXIMO TYPOGRAPHO BASILIENSI HEN=   RICO PETRO, DE BONIS STVDIIS OPTIME   merito, domino & amico suo charissimo	Heinrich Petri (1508-79)	Basel	81r	41		1548-1-30
VIII	De Astronomia	OPTIMO TYPOGRAPHO HIERONYMO   CVRIONI BASILIENSI, AMICO SINGV=   lari	Heironymus Curio (1508-79)	Basel	87r	53		1548-2-1
IX	De Astrologia	HVMANISSIMIS VIRIS IOAN. MONTANO   ET VLTRICO NEVBER, TYPOGRAPHIS NORIM=   bergae clarissimis	Johann vom Berg (d. 1563), Ulrich Neuber (d. 1571)	Nürnberg	95r	35		1548-2-2



X	De Divinatione	ORNATISSIMO VIRO VVENDELINO RI=   HELIO, TYPOGRAPHO ARENTORATENSII   celeberrimo	Wendelin Rihel (d. 1555)	Strassburg	99r	45		1548-2-5
XI	De Geograohia	PAVLO MANVTIO ALDI FILIO, NOBILIS=   SIMO TYPOGRAPHO VENETIIS	Paolo Manuzio (1512-74)	Venezia	107r-109r	46	223	1548-2-13
XII	De Historiis	SEBASTIANO GRYPHIO PRAESTANTIS=   SIMO	Sébastien Gryphius (1492-1556)	Lyon	117r-119v	24	265	1548-3-4
XIII	De Diversis artibus, Mechanicis, & aliis humane uitae utilibus	EGREGIO TYPOGRAPHO CHRI=   STIANO VVECHELO LVTETIAE PARI=   siorum	Christian Wechel (1522-54)	Paris	165r-165v	21	187	1548-4-5
XIV	De Naturali Philosophia	HVMANISSIMO VIRO IOANNI   HERVAGIO TYPOGRAPHO CELEBER=   rimo Basileae	Johann Herwagen (d. 1558)	Basel	181r-181v	68	36*	1548-4-24
XV	De Prima Philosophia & theologia & gentilium	D. IOAN. GYMNICI, TYPOGRAPHO   COLONIENSIS DE BONIS LOTERIS OPTI=   me merito	Johann Gymnich (1485-1544)	Köln	257r-258r	22	127	1548-5-18
XVI	De Morali philosophia	CLARISSIMO LVGDVNENSI TYPO=   GRAPHO IO. FRELLONI	Jean Frelon (d. 1568)	Lyon	261r-261v	30	55	1548-6-16
XVII	De Oeconomica philosophia	ABSOLTISSIMO TYPOGRAPHO VE   NETIIS, VINCENTIO VALGRISIO	Vincenzo Valgrisi	Venezia	303r	46	23*	1548-7-10
XVIII	De Politica	HIERONYMO SCOTO PRAECLARO VENETIIS   typographo	Girolamo Scoto	Venezia	311r	26		1548-7-15
XIX	De Iure civili & Pontificio	PRAESTANTISSIMO APVD VENETOS   TYPOGRAPHO THOMAE IVNTAE, ET CAE   teris clarissimi felicis memoriae uiri Lucae Antonij Iuntae   haeredibus	Tomaso Giunta (1494-1566), Luca Antonio Giunta (1453-1538)	Venezia	329r	32		1548-7-30
XXI	Partitiones Theologiae	NOBILISSIMIS TYPOGRAPHIS   HIERONYMO FROBENIO ET NICOLAO   Episcopo	Hieronymus Froben (1501-63), Nicolaus Episcopus (1501-63)	Basel	a2r-a3r	43	86	1549-2

この表では印刷出版業者名はゲスナーが記述したラテン語と今日通常使われている綴りを併記し、判明している生没年と印刷出版地を示した。それぞれの業者の印刷書の分野とこれらの分類との間には基本的には特別な関連はなく、ゲスナーが適当に割り振ったものと思われる。BV2-1の各分類は折丁できっちりと別れている。それは分類ごとに印刷作業が独立してできるようにしたためであろう。それぞれの分類の原稿量を勘案して業者への讚辞文の行数を割り当てたのではないかと思われる。しかしながら、IのFroschauerとXXIのFroben & Episcopusへの讚辞は本文に先行する前付けの折丁に含まれているため、前付け葉との関係で行数が決められたものとみなされる。これら両業者が巻頭と掉尾を飾ったのはゲスナーにとって最も密接な業者であったためであろう。II, IX, XXIではそれぞれ2名ずつ挙げられているが、それらは当時の印刷業者が頻繁に行っていた協働(パートナー)関係にあった業者である。また、XIXの2名は親子であり、ゲスナーによるLuca Antonio Giuntaへのオマージュが込められている(‘caeteris clarissimi felicis memoriae uiri Lucae Antonij Iuntae’)。時折ゲスナーは讚辞文の後に印刷出版目録を付している( I, XI, XII, XIII, XV, XVI, XXI), そこに掲載されたタイトル数を示した。なお、目録として独立した形式ではなく讚辞文中で書名を列挙している場合がXIVとXVIIで見られるため、それらのタイトル数は[\*]を付して示した。これら以外の業者の印刷出版書については讚辞文の中で様々に言及しているため、タイトル数として算出することが困難であった。さらに、ゲスナーはそれぞれの業者への讚辞文の執筆年月日をIIとIV以外のすべてにおいて記載しているのでこれも書き添えた。これらの年月日はそれぞれの分類を完成した日付であろう。

ゲスナーはこれらの業者のうち次の3人についてはBV1で独立した項目として取り上げている。Johann Oporinus (446r, 6行), Robert Estienne (584v, 33行), Paolo Manuzio (539r, 9行)である。彼らに対するゲスナーの並々ならぬ思いを感じる。ゲスナーはまさに活版印刷術の恩恵にあずかっ

ていたといえよう。

## 5. 小結

以上の諸点からゲスナーが『万有書誌』を執筆した動機が何であったのか考察してみよう。16世紀に活躍した著者たちについて調査してみると多くの記述を費やしている著者たちは学者あるいはプロテスタント改革者であり、カトリック神学者は少数である。BV1全体でみても中世の代表的な神学者はアリストテレスなどの古代著述家、中世初期の教父たち、16世紀の著者たちと比較して記述が限られており、ゲスナーは彼らについてあまり重要視していなかったのではないかと思われる。また、ゲスナーは16世紀同時代の印刷出版業者への讃辞や印刷出版目録の掲載によって情報源となった彼らへの感謝の気持ちを明らかにしている。

ゲスナーが『万有書誌』を執筆編纂していた16世紀の第2四半期は宗教改革がもっとも盛んな時期であり、同時にカトリック教会側からの弾圧が始まった時期でもある。後述する『禁書目録』も1540年代から発行が始まり、カトリック圏ではプロテスタントの書物が没収破壊され焚書が行われた。このような時代にゲスナーはあえて学術的な言語であるラテン語、ギリシア語、ヘブライ語で執筆した古今の著者たちのすべての書物を一覧する壮大な目録を編纂したのである。そこにはカトリック教会への抵抗の姿勢があったのではないか。『万有書誌』を世に出すことで、カトリック教会が行う弾圧にも関わらずこれだけの学術書が世界には存在しているのだということをはっきりと示そうとしたかったのではなかろうか。それはゲスナーのギリシア・ラテン古典研究に由来する人文主義とツヴィングリを範とするプロテスタント精神に基づく学問の普遍性を希求する切なる願望であろう。

## 6. 『万有書誌』と『禁書目録』

宗教改革運動の中でカトリック教会は反カトリック的な書物を抑え込もうとして禁書の指定を強めていった。1543年以前にすでにルター、メランヒトン、布林ガーなどの宗教改革者やエラスムスのようなカトリックを批判する学者を異端にして、彼らの著編書、プロテスタント側が出版したラテン語、ギリシア語、ヘブライ語聖書、俗語訳聖書、聖書注釈書などを禁書に指定していた。1543年にパリ大学神学部はカルヴァン、フェレルなどのフランスの改革派を加えた65書を禁書にするようパリ高等法院に要請した。翌年にはさらに入念な検討を加えて1520年以降に印刷出版されたラテン語書121書とフランス語書109書、都合230書を収録した最初の『*Le catalogue des livres censurez par la faculté Theologie de Paris*（パリ神学部により検閲されし書物の目録）』を出版して、フランス国内でこれらの本の所持、出版、流通を禁じた<sup>19</sup>。

パリ大学神学部とは別にスペイン支配下の低地地方（The Low Countries）ではルーヴェン大学神学部が1518年以降に印刷出版された書物の中から禁書を指定して1546年に『*Edictum Caesaræ*

*Maiestatis promulgatum anno salutis M.D.XLVI. Praeterea catalogus & declaratio librorum reprobatorum a Facultate sacrae Theologiae Lovaniensis Academiae* (1546年公表の大帝の布告、加えてルーヴェン大学聖神学部により咎められた書物の目録と宣言)』を発行した<sup>20</sup>。各種聖書48点、ラテン語書75点、ドイツ語書53点、フラマン語書5点、フランス語書9点が収録された<sup>21</sup>。このような禁書目録はポルトガル(1547年以降)、ヴェネツィア(1549年以降)、スペイン(1551年以降)、ローマ(1557年以降)、ミュンヘン(1566年以降)、リエージュ(1568年)、アントワープ(1569年以降)で次々と発行され、それぞれの地域でプロテスタント文献を弾圧しようとした。

反宗教改革のさらなる動きとして、ローマ教皇パウルス3世が1544年11月に宗教対立を解消する名目でトリエント(現在のイタリア北東部 Trento)での公会議の開催を呼びかけた。プロテスタント側は参加を拒否した。翌年3月に公会議を開催しようとしたが、参加した司教は20名不足であったため開催は延期され同年12月ようやく開催にこぎつけた。しかし、公会議は難航し審議が始まったのは翌年2月であり、それから10年の中断期間を含む約20年後の1563年12月ようやく閉会を見た<sup>22</sup>。この公会議では教会が使用する公式の書物についても決議が行われた。それらを反映した新たな『*Index Librorum Prohibitorum, cum Regulis confectis per Patres Tridentina Synodo delectos, auctoritate Sanctiss. D.N. Pii IIII, Pont. Max. comprobatus* (教皇ピウス4世の権威により承認された禁書目録、トリエント公会議で選ばれし司教が完成させた規則付き)』が教皇庁印刷家となっていたパオロ・マヌーツィオによって1564年にローマで印刷された<sup>23</sup>。この公会議の結果カトリック神学は革新され、カトリック側に新しい精神的な高揚がもたらされたという<sup>24</sup>。

このような禁書目録の発行はゲスナーにとっても大に関係があった。それは1549年のパリ大学神学部による『*Le catalogue des livres censurez par la faculte de Theologie de Paris* (パリ神学部により検閲されし書物の目録)』(Romae apud Antonium Bladum)で次のように記述されて『万有書誌』が禁書に指定されたことから始まる。ゲスナーの名前とBVIの長い書名の途中までと、印刷地と印刷年が明記されている。

Ex libris Conradi Gesneri Tigurini, doctoris medici. | Bibliotheca vniuersalis, siue catalogus omnium scriptorum locupletissimus in tribus | linguis, Latina, Graeca, & Hebraica extantium & non extantium, veterum, & recentiorum in hunc vsque diem, doctorum & indoctorum, publicatorum, & in bilio | thecis latentium. Tiguri. 1545.<sup>25</sup>

続いて1550年のルーヴェン大学神学部発行の『*Catalogi librorum reprobatorum, et praelegendorum ex iudicio Academiae Lovaniensis* (ルーヴェン大学法廷から咎められ選定された書物の目録)』(Lovanii, Ex officinal Seuatij Sasseni)では‘Conradi Gesneri Tigurini bibliotheca vniuersalis’と簡単に記載された<sup>26</sup>。さらに1551年にはポルトガルで刊行された禁書目録『*Este heo roldos liuros*』(Évora: Germão Galharde)にも‘Conradi Gesner Bibliotheca vniuersalis.’と記載されたからである<sup>27</sup>。驚

くべきことにこの目録には 487 タイトルが収録されていた。先行するポルトガルの 1547 年目録（手稿）が 161 タイトルであり、前記のルーヴェンの目録が 349 タイトルであったのと比べて大幅な改訂増補が行われていたのである。その情報源の一つとなったのが BV1 であることが Christoph Hegendorff（BV1 では Christophori Hegendorphini, 165v-166r）の項目に著録されたタイトルとの比較によって明らかになっている。ゲスナーが挙げた 29 タイトル中 21 タイトルがここに列挙された。その他でもルーヴェンの目録に掲載された著者のタイトルが BV1 に基づいて増補されているという。例えば、ブツァーが 7 から 16 タイトル、コルヴィヌス（Corvinus, Anton）が 1 から 16 タイトル、プリンガーが 9 から 12 タイトル、ブルンフェルスが 1 から 9 タイトルなどといったように収録されたタイトルが急激に増加しているのである<sup>28</sup>。

ところが、同年にルーヴェンの禁書目録に基づいてスペインで発行された『*Catalogus librorum reprobatorum ex Iudicio Academiae Lovaniensis*（ルーヴェン大学法廷から咎められた書物の目録）』にはゲスナーの名前はなく‘Bibliotheca librorum.’という書名のみが記載された<sup>29</sup>。これが『万有書誌』であるかどうか疑われている。モレーニ（Moreni, A.）はこれを 1551 年にリュコステネス（Lycosthenes, Conradus）が勝手に刊行した『著者一覧 *Elenchus scriptorum omnium*』（Basel: Johann Oporin）であろうとみなしている<sup>30</sup>。

1554 年ヴェネツィア発行の『*Catalogus librorum haereticorum*（異端の書の目録）』では B の項目で‘Bibliotheca uniuersalis.’という書名が記載され、C の項目でさらに彼の名前‘Conradus Gesnerus’が掲載されて彼の全著作が禁書の対象となった<sup>31</sup>。この禁書目録の編纂でも BV1 と BV2-2 が参照されていたことが明らかになっている。ここでは新たに BV2-2 がプロテスタント書の重要な情報源として大いに活用されたことが判明しており<sup>32</sup>、全部で 596 タイトルが禁書に指定された。

また、パリで 1556 に発行された『*Le Catalogue des livres examinez et censurez par la Faculté de Theologie de l'uniuersité de Paris*（パリ大学神学部により検査され検閲されし書物の目録）』（Paris: Iehan Dallier）では G の項目でゲスナーの名前のもとで（Ex libris Conradi Gesneri Tigurini, doctoris medici.）『万有書誌』が 1549 年のパリ版と同様に書名の途中まで記述された<sup>33</sup>。同時にここではリュコステネスの『著者一覧』の書名が次のように記載された<sup>34</sup>。

*Ex libris Conradi Lycosthenis. | Elenchus scriptorum omnium, ve- | terem scilicet recentiorum  
ex- | tantium & non extantium publi- | catorum. Atque hinc inde in bi- | bliothecis  
latitantium, qui ab ori | gine mu<n>di ad nostra tempora in | diuersis linguis, artibus,  
ac facul- | tatibus claruerunt, ac etia<m> viuunt. | Per Co<n>radum Lycostheuem Ru |  
beaquentem. Basileae.*

さらに、1559 年ローマ発行の教皇パウルス 4 世による『*Index auctorum et librorum*（著者と書物の索引）』ではゲスナー、リュコステネス、ゲスナーの許可を得て『簡略版 *Epitome*』（Zürich:

Froschauer, 1555) を編集したジンムラー (Iosias Similerus, 1530-76) の名前が 'Conradus Gesnerus', 'Conradus Lycosthenes', 'Iosias Similerus' と記載された<sup>35</sup>。

同年にスペインで発行された『*Catalogus librorum, qui prohibentur maximo dato Illustrissimi & Reuerend. D.D. Ferdinandi de Valdes* (卓越した尊敬されしフェルディナド・デ・バルデスの命令により禁止された書物の目録)』(Valladolid, 1559) では、

¶ Conradi Gesneri, epitome Bibliothecae vniuersalis.

¶ Conradi Gesneri, de differentiis Animalium.

と記述され、『簡略版 *Epitome*』とゲスナーのライフワークである『動物誌 *Historiae Animalium*』(vol. 1-4. Zürich: Froschauer, 1551, 54, 55, 58) まで禁書とした。

そして、トリエント公会議の結果発行された上述の 1564 年禁書目録では 1559 年版と同様にゲスナーの名前が記述され、全著作が禁書の対象となった。リュコステヌス、ジンムラーの名前も同様に掲載された<sup>36</sup>。何よりもこの 1564 年の禁書目録を印刷したのはゲスナーが BV2-1 で讃辞を贈ったパオロ・マヌーツィオその人であったことは歴史の皮肉と言えよう。

『万有書誌』は古代から 16 世紀前半までにラテン語、ギリシア語、ヘブライ語で著述した著者たち 5,200 名以上を収録した 16 世紀最大の書誌である。初期教父時代から 16 世紀に至るカトリック教会の聖職者も網羅しているので、カトリック教会としてもカトリック文献を知るための典拠となったはずである。しかし、カトリック教会はゲスナーを異端とみなし、『万有書誌』に含まれる膨大なプロテスタントの情報が広く知られることを恐れて禁書に指定して人々に見ることを禁じた。しかしながら、その裏でプロテスタントの情報を知るために有効な参考図書として禁書目録を増補するために逆用していたのである。

禁書目録に掲載されたことで『万有書誌』はカトリック圏での普及が阻まれることになった。実際、ボローニャの Accademia dei Lincei 所蔵の BV1 およびジンムラー編纂の『簡略版 *Epitome*』には本書が禁書であることが手書きで警告され、プロテスタントの著者ブレンツ、カルヴァン、フス (Hus, Jan)、ツァー、ルター、メランヒトン、エコランパディウス、オジアンダー、セルヴェトゥス (Servetus, Michael)、ツヴィングリの箇所は開くことができないように糊づけされていたという<sup>37</sup>。他方、16 世紀後半ヴァティカン教皇庁に壮麗な図書館を開設した教皇シクストゥス 5 世 (Sixtus V) は『万有書誌』を含む 2 ダースもの禁書を所有していたという<sup>38</sup>。

ここでゲスナーが BV1 で注目した 16 世紀の主要な著者たちがどの禁書目録に登録されていたのかを BV1 の掲載順ではなく著者名順に変更して表 4 で示した。1544 年パリ版から年代を追ってゲスナーが亡くなる前年に発行された 1564 年ローマ版までの間に各地で発行された主な禁書目録を取り上げた<sup>39</sup>。これらの禁書目録で禁書に指定された著者が 45 名、禁書目録には掲載されなかった著者が 30 名であった。プロテスタントおよびカトリックに批判的な著者がカトリック教会からマーク

されなかった著者に対して3対2の割合で勝っていたことになる。

表4 BV1に収録された16世紀の主な著者たちの禁書目録掲載(著者名順)

No.	CERL Thesaurus	Paris 1544	Louvain 1546	Paris 1547	Paris 1549	Venezia 1549	Louvain 1550	Portugal 1551	Spain 1551	Venezia 1554	Paris 1556	Spain 1559	Roma 1559	Roma 1564
29	Aerippsa, Heinrich Cornelius (1486 - 1535)	x	x			x			x	x				x
1	Alciati, Andrea (1492 - 1550)													
41	Aventinus, Johannes (1477 - 1534)													x
67	Belloni, Niccolò (- 1552)													
75	Bibliander, Theodorus (1504 - 1564)			x		x	x	x		x		x		x
6	Brasavola, Antonio Musa (1500 - 1555)													
43	Brenz, Johannes (1499 - 1570)	x	x	x		x	x	x	x		x	x		x
68	Brunfels, Otto (1488 - 1534)	x	x			x	x	x	x	x		x		x
65	Bucer, Martin (1491 - 1551)	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x		x
25	Budé, Guillaume (1467 - 1540)													
44	Bugenhagen, Johannes (1485 - 1558)	x			x				x	x	x	x		x
28	Bullinger, Heinrich (1504 - 1575)	x	x	x		x	x	x	x	x	x	x		x
45	Caesarius, Johann (1460 - 1550)													
11	Calagnini, Celio (1479 - 1541)													
46	Calvin, Jean (1509 - 1564)	x	x	x		x	x	x	x	x	x	x		x
38	Camerarius, Joachim (1500 - 1574)		x					x						x
27	Castellesi, Adriano (1485 - 1521)													
47	Cochlaeus, Johannes (1479 - 1552)													x
5	Corvinus, Anton (1501 - 1553)					x	x	x	x	x		x		x
23	Cousin, Gilbert (1506 - 1572)									x				
48	Cuspinianus, Joannes (1473 - 1529)									x				
74	Durol, Etienne (1509 - 1546)	x	x			x				x				
20	Dubois, François (- 1530)													
36	Dubois, Jacques (1478 - 1555)													
49	Eck, Johann (1486 - 1543)													
16	Erasmus, Desiderius (1466 - 1536)	x		x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x
12	Estienne, Charles (1504 - 1564)													
33	Estrebat, Jacques Louis d' (1481 - 1550)													
50	Fabri, Johannes (1478 - 1541)													
69	Fagius, Paul (1504 - 1549)		x					x		x				
42	Feliciano, Giovanni Bernardo (1490 - 1552)													
18	Florido, Francesco (1511 - 1547)													
64	Fuchs, Leonhard (1501 - 1566)								x					x
52	Gast, Johann (- 1552)		x	x		x		x	x	x		x		x
14	Gesner, Conrad (1516 - 1565)				x		x		?	x	x	x		x
8	Giustiniani, Agostino (1470 - 1536)													
30	Glarean, Heinrich (1488 - 1563)												x	
24	Haloander, Gregor (1501 - 1531)													
13	Hegendorf, Christoph (1500 - 1540)		x			x	x	x	x	x		x		x
2	Laguna, Andrés de (1499 - 1560)													
19	Lambert, François (1486 - 1530)			x	x	x	x	x	x	x		x		x
32	LeFevre d'Étaples, Jacques (1501 - 1575)	x							x	x				x
54	Lonicer, Johannes (1499 - 1569)		x						x	x		x		x
66	Luther, Martin (1483 - 1546)	x	x	x		x		x	x	x	x	x		x
55	Manardi, Giovanni (1462 - 1536)													
22	Megander, Kaspar (1495 - 1545)						x							
71	Melanchton, Philipp (1497 - 1560)			x		x	x	x	x	x	x	x	x	x
56	Monheim, Johannes (1509 - 1564)													
73	Münster, Sebastian (1488 - 1552)		x			x		x	x	x		x		x
9	Nifo, Agostino (1470 - 1538)													
57	Oecolampadius, Joannes (1482 - 1531)	x				x		x	x	x	x	x		x
58	Oldendorp, Johann (1480 - 1567)		x			x		x				x		x
34	Omphalius, Jakob (1500 - 1567)													
3	Osiander, Andreas (1496 - 1552)		x			x		x		x				x
72	Pagnini, Sante (1470 - 1541)													
7	Paleario, Aonio (1503 - 1570)													
15	Pellicanus, Conrad (1478 - 1556)	x	x		x	x		x		x		x		x
39	Péron, Joachim (1499 - 1559)													
51	Pico della Mirandola, Giovanni Francesco (1469 - 1533)													
26	Postel, Guillaume (1510 - 1581)									x		x		x
59	Ravisius Textor, Joannes (1480 - 1524)													
70	Ricius, Paulus (1480 - 1541)													
60	Rivius, Johann (1500 - 1553)					x	x			x		x		x
61	Ruel, Jean (1479 - 1537)													
17	Sarcerius, Erasmus (1501 - 1559)	x				x	x	x	x	x		x		x
35	Scheegk, Jacob <der Ältere> (1511 - 1587)									x				x
10	Steuco, Agostino (1497 - 1548)													
62	Sturm, Johannes <Pädagoge> (1507 - 1589)		x							x		x		
21	Titelmans, Franciscus (1502 - 1537)													
40	Vadian, Joachim (1484 - 1551)					x	x	x	x	x		x		x
4	Vesalius, Andreas (1514 - 1564)													
53	Vives, Juan Luis (1492 - 1540)													
63	Willich, Jodocus (1501 - 1552)		x							x		x		x
37	Ziegler, Jacob (1470 - 1549)					x								x
31	Zwingli, Huldrych (1484 - 1531)	x				x	x	x		x	x	x		x

これら13点の禁書目録に8回以上登場したのは、Brenz, Brunfels, Bucer, Bullinger, Calvin, Erasmus, Gast, Gesner(うち1回は?), Hegendorf, Lambert, Luther, Melanchton, Oecolampadius, Pellicanus, Sarcerius, Zwingliである。ゲスナーはこれらのプロテスタント運動の指導者と同様に

カトリック教会から危険な人物とみなされていたことになろう。

さらに、BV2-1と2-2でゲスナーが讃辞を贈った印刷出版業者について、De Bujandaが作成した1554年までに刊行された聖書のうち禁書に指定された聖書を印刷出版した業者一覧<sup>40</sup>とローマ1559年版禁書目録巻末に掲載された異教宣告を受けた印刷業者の一覧 *TYPOGRAPHI E QVORVM | officinis diversorum Haereticorum | opera prodiere*.<sup>41</sup>を参照して名前が掲載された業者をチェックして表5に示した。異端とされた、あるいは禁書となる聖書を印刷出版した業者が合わせて15、ここには名前が挙がらなかった業者が9であり、およそ3対2である。この数字は前述の著者の場合と同じ結果である。

表5 BV2-1, BV2-2の各分類に掲載された印刷出版業者の異端

分類番号	印刷出版業者名	印刷出版地	禁書聖書の印刷出版	Roma 1559
I	Christoph Froschauer (1490-1564)	Zürich	x	x
II	Johann Bebel (d. 1550)	Basel	x	x
	Michael Isengrin (1500-57)		x	x
III	Johann Oporinus (1507-68)	Basel	x	x
IV	Nikolaus Brvlinger (1499-1559)	Basel	x	x
V	Robert Estienne (1499-1559)	Paris	x	x
VI	Johann Petrius (1497-1550)	Nürnberg		x
VII	Heinrich Petri (1508-79)	Basel	x	x
VIII	Heironymus Curio (1508-79)	Basel		x
IX	Johann vom Berg (d. 1563)	Nürnberg		x
	Ulrich Neuber (d. 1571)			x
X	Wendelin Rihel (d. 1555)	Strassburg		x
XI	Paolo Manuzio (1512-74)	Venezia		
XII	Sébastien Gryphius (1492-1556)	Lyon	x	
XIII	Christian Wechel (1522-54)	Paris		
XIV	Johann Herwagen (d. 1558)	Strassburg		x
XV	Johann Gymnich (1485-1544)	Köln		
XVI	Jean Frellon (d. 1568)	Lyon		
XVII	Vincenzo Valgrisi	Venezia		
XVIII	Girolamo Scoto	Venezia		
XIX	Tomaso Giunta (1494-1566)	Venezia		
	Lucantonio Giunta (1453-1538)			
XXI	Hieronymus Froben (1501-63)	Basel	x	
	Nicolaus Episcopus (1501-63)			

このリストから前者の15業者のうちRobert Estienneは1550年にジュネーヴへ亡命して59年に当地で亡くなったため、1559年の禁書目録の当時はスイスの業者とみなすことができる。つまり、これらの業者はほぼスイスおよびドイツで活動していたのである。ローマのヴァチカン教皇庁がこのようなリストを公表した意図はスイス、ドイツからのプロテスタント書のイタリアへの大量流入の取締りを強化したかったということであろう<sup>42</sup>。

これらを勘案するにゲスナーが『万有書誌』で取り上げた主な16世紀の人々はプロテスタントに関係した人物のほうが多数ではあるが、禁書目録上はカトリック教会から目を付けられていなかった人物も少なからず含まれていたことが判明する。それはゲスナーがプロテスタントの学問に立脚しながらもカトリック側の学問にも少なからず関心を寄せていたことを示しており、彼の学問的な態度が公正なものであったことを証明していよう。

## 7. 結語

本稿では BV1 に収録された 16 世紀の著者を分析し、その中でも特に記述量が豊富な著者たちを抽出して、彼らをプロテスタント、学者、カトリックに大別して記述量の差を調査した。すると記述量の多い著者たちの多くがプロテスタントあるいはカトリック批判者、人文主義者に属し、カトリック神学者は少数であったことが判明した。また、BV1 全体で記述量の多い著者たちを考慮するとそこには中世のカトリック神学者がほとんど見られないことも明らかになった。さらに、16 世紀の著者たちについてゲスナーの重要な情報源となった印刷出版業者のうち、ゲスナーが BV2-1、BV2-2 で讃辞を贈った業者たちについて讃辞文の行数と印刷出版書目録掲載のタイトル数を調査して一覧表で示した。このような分析によってゲスナーのプロテスタント主義者としての立場と人文主義による学問的な公正さが明らかとなり、『万有書誌』執筆の動機が反宗教改革運動により書物を破壊し焚書を行うカトリック教会への抵抗であり、それにより学問の普遍性を希求したのではないかと考察した。

そして、カトリック教会側は禁書目録を発行するが、『万有書誌』が禁書目録の重要な情報源として逆用されていたことから、ゲスナー自身と前述の 16 世紀著者たちが 1544 年からゲスナーが亡くなる前年の 1564 年までに各地で発行された主な禁書目録ではどのように扱われていたのかを調査した。この調査からゲスナーはカトリック教会からはプロテスタント運動の指導者たちと同様に危険な人物とみなされていたことが明らかになった。

さらに、ゲスナーが注目した 16 世紀の主要な著者では、禁書目録に掲載された人物が掲載されていない人物に対して 3 対 2 の割合であった。また、ゲスナーが称賛した同時代のスイス、ドイツ、フランス、イタリアの印刷業者についても、禁書あるいは異端とされた業者と目録に名前が挙がらなかった業者との比率がほぼ 3 対 2 であることが判明した。

このような調査の結果、『万有書誌』の記述から判断できるゲスナーの学問的態度はやはりプロテスタント主義に立脚しながらも人文主義者としてカトリック側の学問にも少なからず関心を向けていたことであろう。

わが国ではゲスナーの『万有書誌』執筆動機を「トルコ族の侵略で破壊された[と]言われたブダペシュトのkolbinnus王の図書コレクションの話に義憤を感じ、残されている写本だけでも、今のうちに記録に留めようと思立ったのである。」とする説がある<sup>43</sup>。また、ゲスナーの執筆の動機を、

1541 年、ゲスナーが *Bibliotheca universalis* の編纂を開始するほんのわずか前に、トルコ軍はハンガリーの大半を占領し、ヨーロッパの人々に大きな衝撃を与えた。(中略) 新たに発見されたまったく未知の人種によってヨーロッパが侵略されるのではないかという危機意識ををもたらし、ヨーロッパの図書館がアレキサンドリアやビザンティン、ハンガリーの図書館のように消滅してしまうのではないかと思わせた。また、宗教改革運動にともなう各地の教会付属図書室



の荒廃や蔵書の散逸については、実際に目にし耳にする機会も多かったに違いない<sup>44</sup>。

としてトルコによる図書館の破壊が大きな要因になったと説明されているが、果たしてこのような説明は可能であろうか。確かにゲスナーはBV1の序文で古代アレクサンドリアの図書館の破壊以来数々の図書館が破壊され多数の書物が失われたことを記した。近時ではハンガリー王マティアス・コルヴィヌス（Matthias Corvinus, Mátyás I, ca.1443-90）の図書館がその例であることを挙げている。

ハンガリー王コルヴィヌスはハンガリーのブダにイタリア・ルネサンスの人文主義の文化を根付かせようとイタリアやコンスタンティノープルなどからラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の写本を収集し、マルシリオ・フィチーノ（Ficino, Marsilio, 1433-99）などのイタリアの人文主義者を宮廷に招いて全体で約3,000冊、4,000～5,000タイトルの写本と印刷本のコレクションを形成したと言われる。コレクションはコルヴィヌス王の死後徐々に散逸を始め、オスマン・トルコによる攻撃を受け国力が弱体化して、1525年にはすでに図書館は相当に荒廃していたという<sup>45</sup>。その翌年ついにモハーチの戦いでトルコ軍に敗れ、その後ハンガリーはハプスブルク家の支配下に入り分割された。

しかしながら、ゲスナーが『万有書誌』を構想し執筆活動を行った1530年代頃にはたしてそのような「義憤」がゲスナーの心によぎったのであろうか。むしろ、パリでのプロテスタント弾圧や各地での書物没収、破壊、焚書のほうがゲスナーにはより直接的な衝撃を与えたのではないか。カトリックによる反宗教改革による書物破壊についてはBV1の序文には書かれていない。むしろ、そのことは序文には書けなかったのではないだろうか。古代からの書物の壊滅を綴ることによってカトリック教会による破壊行為を暗示したのではなからうか。つまり、反宗教改革運動による書物の破壊に抵抗するためにゲスナーは『万有書誌』を執筆したのであろう。トルコに対する「義憤」はあまりに空疎な見解ではないか。また、「未知の人種によってヨーロッパが侵略されるのではないか」という危機意識という漠然とした動機では『万有書誌』は編纂できないのではないだろうか。

最後に、筆者はBV1の後半では個々の項目の記述が短くなる傾向があることを指摘して、その原因としてゲスナーには時間が限られていたのではないかと考えたが、この点について私見を述べよう。彼にはなぜ時間的余裕がなかったのであろうか。BV1が刊行された1545年には教皇が開催を呼びかけたトリエント公会議がいよいよ開会されることが知られていた。ゲスナーはこの機会になんとか『万有書誌』を公刊してカトリック教会へ反旗を翻したかったのではないだろうか。『万有書誌』は夏までに校了しなければならず、彼には編集に十分時間をかける余裕はすでになかったのであろう。

#### [注]

- 1 雪嶋宏一、「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」、『学術研究—教育学・生涯教育学・初等教育学編—』、第59号、2011年、pp. 47-71。
- 2 De Hamel, C. *The book: a history of the Bible*. London: Phaidon Press, 2001, pp. 224-226.
- 3 L. フェーブル、H.-J. マルタン、『書物の出現』下、関根素子ほか訳、筑摩書房、1998年（ちくま学芸文庫）、p. 250。
- 4 De Bujanda, J. M., F. M. Higman and J. K. Farge. *Indx de l'Université de Paris, 1544, 1545, 1547, 1549, 1551, 1556*.

- Sherbrooke: Centre d'Études de la Renaissance, 1985 (Index des livres interdits ; 1), p. 12.
- 5 De Hamel, op. cit., pp. 228-232.
- 6 De Bujanda, J. M., F. M. Higman and J. K. Farge, op. cit., p. 12.
- 7 ハンス・フィッシャー, 『ゲスナー: 生涯と著作』, 今泉みね子訳, 博品社, 1994年, pp. 10-12.
- 8 同上, p. 5.
- 9 BV1, 180r. フィッシャー, 前掲書を翻訳した今泉氏はこの箇所の「Philolog」を「書誌学者」と訳している(フィッシャー, 前掲書, p. 18)がこれは「文献学者」の誤りである。当時まだ書誌学は誕生しておらず, ゲスナーがその祖であるとみなされているからである。
- 10 「檄文事件」については, 宮下志朗, 『本の都市リヨン』, 晶文社, 1989年, pp. 35-254に詳しい。
- 11 Hanhart, J. *Conrad Geßner: ein Beytrag zur Geschichte des wissenschaftlichen Strebens und der Glaubensverbesserung im 16ten Jahrhundert*. Whitefish: Kessinger Publishing, [s. a.] (reprint of the 1824 ed.), pp. 36-41. フィッシャー, 前掲書, p. 18-20.
- 12 フィッシャー, 前掲書, pp. 18-19.
- 13 E.W. モンター, 『カルヴァン時代のジュネーヴ: 宗教改革と都市国家』, 中村賢二郎・砂原教男訳, ヨルダン社, 1978年, pp. 106-113.
- 14 Consortium of European Research Libraries. CERL Thesaurus. <http://thesaurus.cerl.org/cgi-bin/search.pl?start=true> (参照 2011-10-24).
- 15 主要な宗教改革者, カトリック神学者, 学者については, R. シュトゥッペリヒ, 『ドイツ宗教改革史研究』, 森田安一訳, ヨルダン社, 1984年, pp. 312-367 参照。
- 16 宮下, 前掲書, pp. 152-164 参照。
- 17 ゲスナーがBV1を執筆する際に参考にしたアンゲルス・デ・クラワシオの『アンゲルスの良心問題大全』はカトリック教会で使用された聴罪司祭用のマニュアルであり, 当時すでにプロテスタント圏では利用されることがなかった書物である。ゲスナーがこの書物をどのように利用したのかについては, 雪嶋宏一, 「『アンゲルスの良心問題大全』について」, 『早稲田大学図書館紀要』, 59号, 2012年(予定)を参照。
- 18 雪嶋, 前掲書, p. 62.
- 19 De Bujanda, J. M., F. M. Higman and J. K. Farge. op. cit., p. 79.
- 20 De Bujanda, J. M. *Index de l'Université de Louvain, 1546, 1550, 1558*. Sherbrooke: Centre d'Études de la Renaissance, 1986 (Index des livres interdits ; 2), pp. 39-40.
- 21 Ibid., pp. 106-225.
- 22 シュトゥッペリヒ, 前掲書, pp. 181-187.
- 23 De Bujanda, J. M. *Index de Rome, 1557, 1559, 1564 : les premiers index romains et l'index du Concile de Trente*. Sherbrooke: Centre d'Études de la Renaissance, 1990 (Index des livres interdits ; 8), pp. 97-99; Renouard, A. A. *Annales de l'imprimerie des Alde, ou Histoire des trois Manuce et de leurs éditions*. 3. éd. Paris : J. Renouard, 1834 (reprinted ed. by Oak Knoll Books, New Castle, Delaware, 1991), p. 196.
- 24 シュトゥッペリヒ, 前掲書, p. 189.
- 25 De Bujanda, J. M., F. M. Higman and J. K. Farge, op. cit., pp. 188-189, 492. ゲスナーはBV2-1の第X分類「De Divinatione (予言について)」の印刷業者への献辞文に続いて「AD LECTOREM (読者へ)」という一文をわざわざ挿入して禁書に言及している(99v)。これがバリ1549年版『禁書目録』で『万有書誌』が禁書に指定されたこととなんらかの関係があるのかどうかという点については今後の課題としたい。
- 26 De Bujanda, J. M. *Index de l'Université de Louvain*, pp. 240-241, 434.
- 27 De Bujanda, J. M. *Index de l'Inquisition portugaise, 1547, 1551, 1561, 1564, 1581*. Sherbrooke: Centre d'Études de la Renaissance, 1995 (Index des livres interdits ; 4), p. 187, 572.
- 28 De Bujanda, J. M. *Index de l'Inquisition portugaise*, pp. 81-82, 171-172, 571.
- 29 De Bujanda, J. M. *Index de l'Inquisition espagnole, 1551, 1554, 1559*. Sherbrooke: Centre d'Études de la Renaissance, 1984 (Index des livres interdits ; 5), p. 219, 596.
- 30 Moreni, A. 'La Bibliotheca Universalis di Konrad Gesner e gli Indici dei libri proibiti', *La Bibliofilia*, 88, 1986, pp. 131-132.

- 31 De Bujanda, J. M. *Index Venise 1549, Venise et Milan 1554*. Sherbrooke: Centre d'Études de la Renaissance, 1990 (Index des livres interdits ; 3), pp.230, 253, 398, 400.
- 32 Ibid., pp. 94-98.
- 33 De Bujanda, J. M., F. M. Higman and J. K. Farge, op. cit., pp. 188-189, 543.
- 34 Ibid., pp. 210, 547.
- 35 De Bujanda, J. M. *Index de Rome*, pp. 396, 758, 770.
- 36 Ibid., p. 829, 851.
- 37 Balsamo. L. 'Bibliografia e censura ecclesiastica : a proposito dell' *esemplare Linceo della "Bibliotheca Universalis"* di Konrad Gesner', *Gutenberg-Jahrbuch*, 1976, p. 300.
- 38 Grendler, P. F. *The Roman Inquisition and the Venetian Press, 1540-1605*. Princeton: Princeton University Press, 1977, p. 290.
- 39 それぞれの禁書目録については次の典拠を使用した。パリ 1544, 1547, 1556 版は De Bujanda, J. M., F. M. Higman and J. K. Farge. *Indx de l'Université de Paris* ; ルーヴァン 1546, 1550 年版は De Bujanda, J. M. *Index de l'Université de Lowain* ; ヴェネツィア 1549, 1554 年版は De Bujanda, J. M. *Index Venise 1549, Venise et Milan 1554* ; ポルトガル 1551 年版は De Bujanda, J. M. *Indx de l'Inquisition portugaise* ; スペイン 1551, 1559 年版は De Bujanda, J. M. *Index de l'Inquisition espagnole* ; ローマ 1564 年版は De Bujanda, J. M. *Index de Rome* を参照。
- 40 De Bujanda, J. M. *Index de l'Inquisition espagnole*, pp. 153-154.
- 41 De Bujanda, J. M. *Index de Rome*, p. 332-346, 786.
- 42 プロテスタント書のイタリアへの密輸については Grendler, op. cit., pp. 182-200 に詳しい。
- 43 藤野幸雄, 『図書館史・総説』, 勉誠出版, 1999 年 (図書館・情報メディア双書 ; 1), pp. 90-91.
- 44 戸田慎一, 「Bibliotheca universalis 編纂のための情報源」, 日本図書館学会年報, 33 (1), 1987 年, p. 2.
- 45 *Bibliotheca Corviniana : die Bibliothek des Königs Mathias Corvunus von Ungarn*. München: F.A. Harbig, 1969, S. 23-24.

# Conrad Gessner's *Bibliotheca Vniuersalis* and the Reformation

Koichi YUKISHIMA

## Summary

This article analyzes contemporary authors with Conrad Gessner included in the vol. 1 of his *Bibliotheca universalis* (forward 'BV1') (Chart 1), extracts 75 authors especially written in the extensive amount among them, and divides them into three categories of Protestants, Scholars, and Catholic theologians (Chart 2). The principal authors out of these 75 mostly consist of Protestants and scholars criticizing the Catholic Church, although some Catholic scholars are included among them. And then the article shows the details of the printers whom Gessner presented the tributes to in the *Pandectarum* (forward 'BV2-1') and the *Partitiones Theologicae* (forward 'BV2-2') (Chart 3). By these analyses, it is highly probable that the purposes of Gessner's writing motivation of the *Bibliotheca universalis* might be a resistance to the Catholic Church destroying and firing Protestant books in the fair academic position as a Protestant fundamentalist and humanist longing for the universality of study.

As a result of analyses of the relation between Gessner's *Bibliotheca universalis* and several editions of the *Index librorum prohibitorum*, 3-to-2 ratio of the principal authors of the 16<sup>th</sup> century in the BV1 are registered in the Indexes (Chart 4). Also, mostly the same ratio of the printers dedicated by Gessner in BV2-1 and BV2-2 are registered in the 1559 edition of the Roman Index and a list of the prohibited bibles presented by De Bujanda (De Buyanda 1984, 153-154) (Chart 5).

It is clear that Gessner's motivation compiling the *Bibliotheca universalis* might be a kind of demonstration of all books existing in the world from the ancient times to the 16th century against the Catholic Church based on the position of Protestantism and humanism, although some Japanese scholars consider that Gessner's purpose of the *Bibliotheca universalis* might be an indignation against Ottoman Turkey destroying the library of Matthias Corvinus, King of Hungary.